
大好きです 2

karinko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大好きです 2

【Nコード】

N5714H

【作者名】

karinko

【あらすじ】

あの日から3年後。理沙に会うため、大阪から戻ってきた達也。けど、理沙に会うまえに事故で記憶喪失になって…

プロローグ 達也side(前書き)

この小説は大好きです の続編です。

大好きです を読んでいない方はわからないところもあるかもしれないので、一応前作にも目を通していただいてから読んでくださるとうれしいです。

プロローグ 達也 side

プシュー…

電車が、とある駅で止まった。

オレは踏みしめるようにそこに下り立つ。

… なつかしいな。

たった今下り立った町は特別な町。

数か月、幸せな時間を過ごした町。

オレの大好きな奴が住む町。

… 早くあいつに会いたい。

足早に改札口を通り抜け、駅をでる。

ひさしぶりに見た町は、3年前と何も変わっていないなかった。

大きく空気を吸い込むと、また歩を進める。

目的地は、あいつの住む場所。

オレがあいつに初めて告った場所。

あいつがオレを待っていてくれる場所。

早く、早く、早く…

早歩きが、小走りになる。

一刻も早くあいつに会いたかった。

目的地が、あいつの家が見えてきた。

思わず、頬がゆるむ。

あと少し、あと少しであいつに会える…!!

その時、

プー!!!!!!

大きなクラクションの音がした。

ドンッ!!

音のした方を見る前に、何か何かにぶつかったような音がした。

え…???

何が、起こったん…???

まあいいや。

とりあえずあいつのところに行かな…

けれど、体が動かなかった。

…あれ???

なんで、オレ、地面に倒れてるん??

ドロツ…

目の前に、赤い液体が広がる。

これは…

血???

動かない手をムリやり動かして額をなでた。

その手を目の前に持つてくる。

手は震えていて、真っ赤な鮮血がしたっていた。

オレの…血???

近くでパトカーと、救急車の音がした。

…ああ、そうか。

多分オレ、ひかれたんや。

だんだんと視界がぼやけていく。

オレ…

死ぬんかな…

いや、まだ死ぬわけにはいかんのや。

オレはあいつにあわなあかん。

そう思つて、立ち上がろうとした。

それでも体は言うことをきかない。

…あかん。

もう、どこも動かされへん。

あと少しであいつのもとに行けるのに…

意識がもつろうとしてくる。

かすれる意識の中で、あいつの声が小さく響いた。

『絶対、絶対だよ！！会いにこないと許さないんだから！！』

ゴメン…

約束、守れそうにないわ…

せめて最後に…

おまえの姿を見たかったな…

理沙…

頭の中でつぶやいて、

オレは意識を手放した。

プロローグ 達也 side (後書き)

大好きです の続編です！

というか、続きだすのはやすぎですかね…??
とりあえず！

前作から3年がたちました！

ということは、理沙達は大学生??

一応このまえは高校1年という設定でしたので…

そしてやつちやいました！

達也、事故にあっちゃったよ！

つつこみどころ満載のプロローグですが…(たとえば車にひかれ
たのにどれだけ意識たもってるんだよ!とかです。)

へたくそな文章ですが、つきあっていただけたらうれしいです)

^o^)

1話 記憶喪失 理沙 side

『理沙：おちついて聞いてね？?』

くぐもった声。

『斎藤くんが、事故で病院に運ばれたんだって。』

心臓が止まるかと思った。

私は病院にかけこんだ。

急いで知らされた病室へ走る。

バンツ！

大きな音を立てて病室のドアをひらいた。

そこには、私に知らせてくれた美香と吉沢くんの姿。

「達也は…???」

つぶやくと、2人はためらうように顔を見合わせた。

そして、うながすようにベッドを見る。

私はかけよった。

ベッドの中で、3年前に離れ離れになってしまった、

今日ひさしぶりに会うと約束していた、

ずっとずっと待ち焦がれていた、愛しい人が眠っていた。

頬にガーゼをはって、頭には包帯がぐるぐると巻いてある。

「達也…」

私はその頬をそっと撫でた。

それでも達也は死んでしまったかのように動かない。

「ねえ…達也は大丈夫だよね?？」

美香の方をみないで問いかけた。

美香は何も言わず、変わりに吉沢くんの声がした。

「…体は全然大丈夫らしい。けど…頭を強く打ったらしくて…」

達也の目が少し動いた。

ゆっくりと、瞼をあける。

「達也!!」

私が名前を呼ぶと、達也はじつと私を見た。

そして、口を開く。

「おまえ…誰??」

「えっ…??」

時が止まった気がした。

何…それ…??

私が固まっているのを見て、美香が小さな声で言った。

「…記憶喪失だって。」

「きお…く、そうしっ…??」

それって…

今までのこと、全部忘れちゃったってこと???

私のこと…

忘れちゃったってこと…???

…そんなのウソだ!!

私はぼんやりと私を見ている達也の肩を揺さぶった。

「うそ！うそだよね！？ほんとに私のこと覚えてるんでしょ！？」

「…??？」

達也はいぶかしげに私を見た。

「そうだ！みんな私を騙そうとしてるんでしょ！？バカだなあ！
！そんなのひつかかるわけないじゃん！！」

きつとそうだ！

ほら、きつともうすぐ、達也が笑いながら『ドッキリ〜』とか言
うんでしょ！？

わかってるんだからね！！

「理沙…」

美香が困ったように私を見た。

「ウソじゃないの…：わかってるだろ??」

吉沢くんがはっきりと言った。

…わかってる??

わかってないよ！！

信じたくないの!!

「ねえ、達也！覚えてるよね！？覚えてるんでしょ！？」

達也はじつと私を見て、サラつと言った。

「…悪いけど、全然覚えてない。」

本当に、他人を見るような目で私を見る達也。

やめて…

そんな目で見ないで…??

そんな他人みたいな目で私を見ないで!!

いつもの優しい目で私を見てよ…

「達也あ…!!」

吉沢さんと美香が病室をでていった。

真っ白な病室の中には、真っ白な達也と私の2人きり。

うつむいて、ベッドの隣に座る私を、達也は訝しげに見ながら言った。

「おまえ…オレの知り合い??」

何の感情もない声。

ほんとに、全部忘れてしまったんだな。と思った。

「…うん。私、達也の彼女だったんだよ??」

「彼女…??おまえが…??」

こくっとうなずく。

…ホントに、ほんとに私のこと忘れちゃったの…??

おまえなんて、言わないでよ。

まえみたいに、私の名前を呼んで??

あの笑顔で、私の名前を呼んでよ。

ねえ?

あの日、約束したよね?

絶対にまた、戻ってくるって。

約束、守ってよお…

お願い…

帰ってきてよ…

達也…

1話 記憶喪失 理沙 side (後書き)

なんというか…
終わり方が微妙です…

1話 知らない世界 達也 side (前書き)

理解できない文章あり！

1話 知らない世界 達也 side

目が覚めたら、そこは真っ白な部屋の中だった。

ここは…どこ…??

「あっ！目が覚めたみたいだぞ！」

「ほんとだ！斎藤くん！」

全然知らない奴らが、オレを見て笑顔を浮かべていた。

こいつらは…

誰??

「大丈夫か？事故にあったって聞いてだいぶ心配したんだぜ??」

男の方がへへっと笑った。

「もうすぐ理沙も来るからね！」

女の方がはげますようににっこりとした。

…事故??

…理沙??

何のことがさっぱりわからない。

オレに話しかけてるやつらをいくらじっくり見て見ても、やっぱりオレの全然知らない人物だった。

「その…おまえら…誰??」

ためらいがちに口を開いて見た。

男と女が同時に目を見開くのがわかった。

「えっ…??何言ってるんだよ!しばらく会ってなくて忘れちゃったってか!?!オレだよ!吉沢だよ!」

男の方が何ごともなかったかのように笑った。

「ほら!私、三浦美香だよ??忘れちゃった??」

女の方は悲しそうにほほえんだ。

吉沢…??

三浦…??

聞いたこともない名前。

えっ…??

オレの知り合い??

いや…

そのまえに…

ズキッ！

頭に一番肝心の疑問が浮かぼうとしたとき、頭に鋭い痛みが走った。

「つつつ！！」

脳がオレに眠れと信号をだしている。

オレはそれに従って、眠りこんでしまった。

瞳を閉じる前、知らない男女の蒼白した顔がちらりと目にはいった。

さわがしい声が耳に入ってきた。

うるさいなあ…

そう思って、重い瞼をゆっくりとひらく。

すぐ目の前に、知らない女の顔があった。

「達也！！」

そいつはオレが目を覚ましたのを確認すると、安心したように笑顔を見せて言った。

こいつは???

「おまえ…誰??」

「えっ…??」

さっきと同じように女に訪ねてみると、そいつは顔を蒼白させて固まった。

その様子を見て、初めて見た女が小さな声でオレのまえの女に何かを言った。

「きお…く、そうしっ…??」

オレのまえの女がときれがちに言う。

しばらく固まると、狂ったようにオレの肩をつかんで揺さぶった。

「うそ！うそだよね！？ほんとに私のこと覚えてるんでしょ!？」

「…??」

女は急に笑いだした。

「そうだ！みんなで私を騙そうとしてるんでしょ!？バカだなあ！
！そんなのひっかかるわけないじゃん!！」
何???

この女…

頭がおかしいのか??

それより…

今、オレは危ないのかもしれない。

オレは今、誘拐か何かをされてこんなところにいるんじゃないのか??

だってオレはオレのまわりにいるやつらなんて、全然知らない。

たしか…

この女、さっき『きおくそうじつ』とかつぶやいてたよな??

そうか。

分かった。

最初に来た男女は、オレ自身に本当に記憶喪失になったと思い込ませるように演技しにきたんだ。

そして、この女は頭がおかしくなった人間でオレのことを別のやつと勘違いしてる。

なるほど。

そう言うことか。

なら、なんとかしてここから逃げだすとして…

「ねえ、達也！覚えてるよね！？覚えてるんでしょ！？」

女がオレに向かって必至の形相で問いかけてきた。

とりあえず、記憶喪失になったと思い込んでいる演技をしておこう。

「…悪いけど、全然覚えてない。」

女はオレの言葉を聞きとると、目に涙をためた。

「達也あ…！！」

そしてたまらないとでもいうような声で、誰かの名前を呼んだ。

…多分、達也っていうやつが、この女の前の彼氏やったとかそんな感じなんだろうな。

ぼんやりと考えているうちに、最初の男女2人が外にでて、病室にはオレと女の2人きりになった。

女はオレのベッドの隣に座ってうつむいている。

なんだかこの、頭のおかしくなった女が気の毒になってきて、話しかけてみることにした。

「おまえ…オレの知り合い??」

女は顔をあげると、ほんの小さな微笑みを口元に浮かべていった。

「…うん。私、達也の彼女だったんだよ??」

「彼女…??おまえが…??」

オレが問いかけると、女はこくりとうなずいた。

やっぱりな…

この女はオレが他の誰かだと勘違いしているんだ。

けど、あの男女はなぜ、この女の相手にオレを選んだんだ??

オレがこの女の元彼に似てたとかか??

考えを巡らせていた時、

ふと、さっき浮かぼつとしていた疑問が頭に浮かんだ。

…あれ???

そう言えば…

信じられないほど、簡単で、けどオレにはわからない疑問。

オレは…

誰???

やっと、オレが本当に記憶喪失になっていたということを理解した。

そして同時に気がついてしまった。

今オレは、何もかもが、自分自身さえもが分からない世界にほづりこまれたんだ。

1話 知らない世界 達也side（後書き）

はい…

意味が理解できません…

記憶喪失で達也side書くのって難しい…

というかどんな想像してるんだよ！って感じですよ；

達也の想像だと吉沢と美香が完全な悪者で理沙が気が狂った人とい

うことに…

かわいそうです；

2話 退院 理沙 side

今日は達也が退院する日。

まだ記憶は戻っていないけど生活のなかでもしかしたら戻るかもしれないからとりあえず退院するらしい。

達也の家族は仕事で忙しいらしくとりあえず私が迎えに行くことになった。

病院へ足を進めながら小さくため息をつく。

私は達也が入院している間も毎日病院にかよっていた。

それでも達也の中での私の立場は『ただの友達』。

…でも『他人』から『友達』になったんだよね？

うん。そのうちきつともとの立場に戻れるよ…！

考えているうちに大きな白い建物が見えてきた。

扉をくぐるともう達也が荷物をまとめて私を待っている達也が目につく。

達也は私に気がつくのにこっと笑って私に手をふった。

私は急いで達也にかけよる。

「ゴメン、遅くなった！」

「ああ、全然大丈夫だから。それよりオレってこれからどこいくんだ？」

関西弁じゃない。

ズキッと胸がしめつけられた。

やっぱり…

ここにいる達也は達也じゃないんだ…

あらためて思い知らされたような気がした。

それでも私は笑顔をつくる。

「うーん。とりあえず私の家いこっか！」

私は大学生になった。

電車で二駅ほどの結構近い大学にかよっている。

それで経験もかねて今は1人暮らしをしている。

だから今からとりあえず行くところにはちょうどいいんだ。

「えつと…お邪魔します??」

達也のバカ丁寧な言い方に私は思わず吹き出してしまった。

「何それ！？なんか達也らしくな…」

そこで思わず言葉を切る。

そうだ…

今の達也はまえの達也とは違うんだ…

「どうした??」

「…ううん、なんでもない!」

不思議そうに尋ねる達也に私は笑顔をつくってかえした。

「とりあえずお茶入れるから適当に座ってて!」

達也はきよろきよると部屋を見回してテーブルのそばのソファに座った。

私はお茶とお菓子を持ってくると達也と向かいあって座った。

「で、病院で聞いてた話じゃ、オレの家って大阪にあるんだよね？それじゃあオレ、大阪に戻った方がいいのか?」

チクッ…

胸に何かが刺さったような痛みが走った。

大阪に…戻る。

絶対にまた、ここに戻ってくるから

達也が大阪に戻ったあの日。

達也はそう言った。

でも…

達也は戻ってこなかった。

戻ってきたのは達也のカタチをしたまったく別の人。

それでも達也に戻るかもしれない。

でも…今、達也を大阪にかえしちゃったらもう戻らない。

なんとなく、そんな気がした。

どうにかして達也を引き留めないと…！

「…ううん。きつと達也は目的があってここにきたんでしょ？それならとりあえずその目的を思い出すまでここにいなよ。そうだ！しばらくだったら私の家にもいいから！」

多分達也がここにきた目的は私に会うため。

それを思い出してくれたら…

きつともとの達也に戻ってくれる。

「ここに??… そうだな。多分オレもなんかあってここにきたんだ。何か大切なことかもしれないし…」

達也はしばらく考えるように下を向いた。

「うん。それじゃおまえがいいならここにいさせてもらう。本当に… いいのか??」

「う、うん!」

私は大きくうなずいた。

きつと私と一緒にいれば達也は思い出してくれる。

そう思うとうれしくなって自然に笑みがこぼれた。

「よろしくね! 達也!」

2話 退院 理沙side(後書き)

かなりひさしぶりの投稿です…
あいかわらずよくわからなくてすみません；

2話 目的 達也 side

オレの記憶がなくなってから一週間がたった。

どうやらオレは今日で退院するらしい。

オレはもともと少ししかない荷物を手早くまとめて病院の入口のまえのイスに座った。

もうすぐしたらあのオレの『彼女』だったらしい女が迎えにくる。

名前は立川理沙というらしい。

そしてオレの名前は斎藤達也。

…まったく覚えていない。

医者は自分の名前まで覚えていないというのは重傷だと話していた。

そして生活の中でもしかしたら記憶が戻るかもしれないということ
で退院することになったんだ。

とりあえず立川からきいたオレについての情報はこうだ。

オレは大阪に住んでいた。

そして夏の数か月だけ立川と同じ高校にいた。

立川はオレの彼女だったらしい。

…これだけの情報で自分のことを分かれと言われても分からないに決まっている。

オレは…

このまま記憶が戻らないのか…??

そう思った時、自動ドアが開く音がした。

見ると立川がこっちに向かってくる。

(一応)知り合いを見つけたオレはなんとなくほっとして手を振った。

立川はオレを見ると小走りになった。

「ゴメン、遅くなった！」

「ああ、全然大丈夫だから。それよりオレってこれからどこいくんだ？」

そう。

それがずっと気になってたんだ。

例えオレに行くあてがあつたとしてもオレはそれを覚えていない。

もし今立川に見放されたらオレは何も分からない世界で一人になる。

「うーん。とりあえず私の家いこっか！」

立川は無理につくったような笑顔で言った。

どうやら立川は1人暮らしをしているらしい。

立川のアパートについてどうやって入っていいか分からないオレは軽く頭をさげた。

「えっと…お邪魔します??」

そうすると立川に大笑いされた。

「何それ!?なんか達也らしくな…」

立川は途中で言葉を切った。

同時に立川の笑顔も消える。

「どづした??」

「…ううん、なんでもない！」

オレが尋ねると立川はまたつくったような笑顔を見せた。

「とりあえずお茶入れるから適当に座ってて！」

適当に座っててと言われても…

オレは部屋を見回し、テーブルのそばのソファに腰をおろした。

ほどなくして立川がお茶とお菓子をテーブルに置いてオレと向かいあつて座る。

「とりあえずオレは立川の家に来てみたが、これからどうすればいいんだ??」

「で、病院で聞いてた話じゃ、オレの家って大阪にあるんだよね? それじゃあオレ、大阪に戻った方がいいのか?」

立川の顔が少し曇った。

「えっ?」

オレ、何か変なこといったか!?

オレがとまどっていると言川は何かを思いついたように顔を輝かせた。

「…ううん。きっと達也は目的があつてここにきたんでしょ? それならとりあえずその目的を思い出すまでここにいなよ。そうだしばらくだつたら私の家にもいいから!」

ここにきた…目的??

たしかにオレは何か目的があつてここにきたんだよね…??

「ここに??…そうだな。多分オレもなんかあつてここにきたんだ。何か大切なことかもしれないし…」

なんとなくそれはオレにとってとても重要なことのような気がした。

忘れてはいけない…

とてももなく重要な…何か。

それを思い出すまではオレはここにいなくちゃいけない。

きっとそうなんだ。

それなら…

「うん。それじゃおまえがいいならここにいさせてもらう。本当に…いいのか??」

いくら記憶をなくす前のオレが立川の彼氏だったとしても、1人暮らしの女の家を男をころがりこませていいんだらうか??

「う、うん!」

けど立川は大きくうなずいた。

そして今度は多分つくりものじゃない笑顔で言った。

「よろしくね!達也!」

こうしてオレは立川の家に住まわせてもらうことになったんだ。

その日の夜。

夢を見た。

そこは学校。

たくさんの女子がオレのまわりにいた。

けどオレは窓から教室の中にいる『誰か』を見ていた。

その『誰か』もオレを見ている。∴偶然目があったんだ。

栗色のショートヘア。可愛らしい、整った顔立ち。∴どこかで見た顔。

こいつは

そのとき、ふいに夢はとぎれた。

2話 目的 達也 *side* (後書き)

一気に書いたので内容が適当です…

3話 どうして？ 理沙 side

「うーん…どうしよー！」

立川理沙。

朝からすごい悩み事を背負っています。

達也がうちにいるのは別にいいけど…

…今日、学校なんだけど。

達也と一緒に連れていけるわけないし…

だからといってずっと家にいてもらうのも悪いし…

「…どうしたんだ？そんな頭かかえて…」

へっ???

驚いて後ろを見るとまだ寝ぼけ眼の達也がぼんやり後ろに立っていた。

どーでもいいけど…

起きるの早いねー…

「うーん…その、私今日学校あるんだけど…」

「学校？…ああ、別にオレおいて行ってきていいぜ？オレなら大丈夫だから！」

大丈夫ってあなた。

記憶ないんですよ…??

大丈夫なわけな…

そのときふと思った。

もしかしたら…

1人でいるうちに何かの拍子で記憶もどるかも…

…うん。

そうだよね。

「それじゃ私学校行ってくるから…とりあえずおとなしくしててね」

勝手に外でられて何かあったらやだし…

「ああ！んじゃオレはもう一回寝てくるわ…」

達也はそう言つと目をこすりながら戻っていった。

なんのために起きてきたんだろ…??

…まっ、いつか！

それよりはやく行かなきゃ！！

実はもう遅刻ギリギリなんだよね……

…急ごう！

私はあわてて家をでた。

改札口に定期をさしこみながら軽いため息をつく。

…今日は全然授業に集中できなかったな…

なんか達也のことが気になって気になって…

家に帰ったらいなくなってそうで…

まっ、そんなわけないよね！

…でも一応はやくかえろ…

そう思って急いで電車に乗り込んだ。

同時にドアが閉まる。

良かった…

なんとかセーフだ！

とりあえず帰ったら夕飯の支度しなくちゃね。

って…なんか私、お母さんみたい。

そうだよ！

記憶がないとはいえ達也と2人で暮らすんだ！

なんか結婚してるみたい…！

くすつと笑みがこぼれる。

ますますはやく帰らないといけない気になってきた。

家の近くの駅に着く。

私はなんとなく浮足立って改札口をぬけた。

帰るまえに買い物していいのかな？

昨日は急いでだからありあわせだったけど…

今日は達也においしいごはんを食べさせてあげたい…

私は近くのスーパーに向かって足を進めた。

そのとき…

「達也！次どこ行くー??」

ドキッ！

私は思わず声のした方を見た。

…まさか、達也って違う人のことだよな???

達也って名前の人、たくさんいると思うし…

なんとかそう思いこみながら。

けど、思いこみは間違ってた。

そこには髪の毛の長い美人の女の人。

隣には…

「達也…」

私の…

大好きだった人がいた。

何それ…

私は2人に気づかれないようにスーパーまで走った。

自然と涙がこぼれおちる。

どうして…どうして…？どうして…！？

頭の中ではちゃんと理解できる。

だって達也は記憶をなくしてるんだもん。

私のことは何も思っていないんだもん。

他の女の子をつくっても当然でしょ???

でも心はついていかない。

どうして!??

あんなに私のことを好きでいてくれたのに…

少し離れちゃったくらいでもう忘れちゃったの!??

他の女の子でも…

いいの…??

「ふえ…」

私はスーパーマのまえに座り込んだ。

まわりの人が迷惑そうに私を見る。

けどそんなのは気にならなかった。

頭に残るのはただ、達也が他の女の子と一緒にいた光景だけ。

…それくらいでこんなになる私っておかしいのかなあ…???

けど、おさえきれない。

涙がとまらない。

だつて…

私は3年たった今でも、ずっと達也のことが好きだつたんだもん…

なんとか買い物を終えた私はとぼとぼと家路についた。

家に帰るのが怖い。

達也に会うのが怖い。

自然と足取りが重くなる。

けど、進むかぎり、確実に目的地には近付いていく。

私はゆっくりと扉をあけた。

できるだけ、何も見ていないことをよそおって。

リビングに入ると達也がソファに座ってテレビを見ていた。

まるで、今日は一日ずっと家にいたような光景。

でも、違う。

服はちゃんと着替えてるし、朝ははねていた髪の毛も、すっかりもとに戻っている。

さっきのは見間違えだと思ったけど…

違うんだね…

「あ、立川！おかえりー！」

達也が私に気がついて私に笑顔を向ける。

「…ただいま！」

私もなんとか笑顔をつくって返した。

そんな私をじつとみる達也。

な、なんだろ…???

私何かおかしいところあるのかな…???

「おまえ、さっきまで泣いてた??」

「えっ…??なんで??」

私、もう泣きやんでるよね??

達也は自分の目をさして言った。

「目、腫れてるぞ」

「あ……」

そっか……

そんなところまで気がつかなかつたよ……

「……なんでもないよ！ただ……」

私はそこで言葉をのみこんだ。

理由なんて……

達也に言えるわけがない。

「なんだよ？学校で何かあったのか？？」

まったく分かってない達也。

……学校で何かあったとかじゃない……

達也は、まったく分かってないんだね。

なぜか頭に血がのぼる。

私はスーパーの袋を達也に投げつけた。

「った！何すんだよ！？」

達也が驚いて私を睨む。

「誰のせいと思ってるのよ!?!」

私はそれだけ言い残すと自分の部屋へ飛び込んだ。

もう、達也なんて知らない!

やっぱり、あの人は達也なんかじゃないんだ!

だって私の気持ちなんてなんにも分かってくれないんだもん!

ベッドにたおれこむ。

頬に一筋涙が伝うのが分かった。

ねえ、達也…

はやく戻ってきてよ…

私どんなに離れてても、達也がいるって知ってればいくらでも待てるよ???

けど、目の前にいるのに…

それがあなたじゃないなんて…

私、そんなのたえられない…

3話 どうして？ 理沙 *side* (後書き)

多分この小説、短くなる気がします。
プロローグをぬいて4話くらい？？
わかりませんが…

3話 疑問 達也 side

朝目が覚めるとオレは全然知らない場所にいた。

「んー…」

そしてふいに思いだす。

ああ、そういえば立川の家にいさせてもらうことになったんだ…

ぼんやりしながら部屋をでると立川が何やら困り顔で頭をかかえている。

「…どうしたんだ？そんな頭かかえて…」

なんかこいつが変な人に見える…

立川はオレを見て少し驚いたような表情を見せた。

「うーん…その、私今日学校あるんだけど…」

「学校？…ああ、別にオレおいて行ってきていいぜ？オレなら大丈夫だから！」

それに立川がおらん方が都合なこともあるしな！

立川は少し悩んで言った。

「それじゃ私学校行ってくるから…とりあえずおとなしくしててね

「！」

「ああ！んじゃオレはもう一回寝てくるわ……」

オレはそう言いながらさっきの部屋に戻る振りをした。

そして立川が玄関をでるのを確認する。

…よし、行ったな。

オレは自分の荷物の中から着替えの服をとりだした。

おとなしくなんてしてるわけないじゃねえか！

せつかく病院も退院したんだ。

遊びにいかねえと！

まあ、記憶がなくて少し不便なところもあるかもしれねえけど…

そこは大丈夫だろ！

オレはそう軽く片付けると外に出ていった。

時刻は午後5時ごろ。

オレは慌てて立川の部屋に走る。

そつと玄関に入り、立川がまだ帰ってきていないのを確認してから
ほつと溜息をついた。

よし…

なんかばれたらややこしいことになりそうだからな。

とりあえず何事もなかったかのようにテレビでも見とくか！

そう思ってソファに座ってテレビをつけたとき、

ガチャッ

ちょうど立川が帰ってきた。

せ、セーフ…

ほつと息をついてからオレは努めて明るく言った。

「あ、立川！おかえりー！」

「…ただいま！」

立川もなぜかムリしているとバレバレの明るい声で言う。

どうしたんやろ？

やっぱばれたか??

立川の顔を良く見ると目が腫れていた。

「おまえ、さっきまで泣いてた?？」

「えっ…??なんで??」

立川が驚いたようにオレに訪ねる。

そりゃ…分かるだろ…

「目、腫れてるぞ」

「あ…」

立川はさも今気がついたかのように目をなでた。

そしてまたムリに笑顔をつくる。

「…なんでもないよ!ただ…」

立川はそこで黙り込んでしまった。

「なんだよ?学校で何かあったのか?？」

例えば好きだったやつにふられたとか…

いや、そう言えば立川の彼氏はオレだったとか言ってたな。

そんな風に軽く考えていると急に立川に持っていたスーパーの袋を投げつけられた。

「つた！何すんだよ！？」

オレなんか悪いこと言ったか！？

オレが思いきり立川を睨むと立川もオレを睨み返してきて叫んだ。

「誰のせいと思ってるのよ！？」

そう言い残し立川は自分の部屋へ飛び込んだ。

ドアをくぐる瞬間、頬を伝う涙が見えた気がした。

…なんだよ？

オレ、本当になんか悪いことしたか？？

オレが今日してたことと言えば、その変にいた結構いい女に声かけて遊んでたくらい…

って、それがばれてたとかか！？

…んー、なんかばれてたっほいなあ。

少し罪悪感を感じたがすぐに頭の中で片付けた。

…まあいいか。

オレは今、前の記憶がないんだ。

だからたとえ前のオレがあいつと付き合っていたとしても、オレに

は関係ない。

だってオレは前のオレとは違う人間なんだから。

ま、明日適当におだてたらあいつの機嫌もなおるだろ。

オレはすぐに考えるのをやめて、つけたばかりのテレビに集中した。

そしてその夜。

また、夢を見た。

そこは住宅街の道の真ん中。

怒りの表情で涙を流す『誰か』がとても愛おしくて痛いほどに『誰か』を抱きしめた。

そしてオレは『誰か』の耳元で本当に小さな声で告白した。

『誰か』が笑顔でオレのことを好きと言った。

うれしくて、ずっとずっとこうしていたいと思った。

…そう、オレは　　と一緒にいられるだけで幸せやったんや…

夢がとぎれるまえ、最後にオレとよく似た声が聞こえたきがした。

3話 疑問 達也 side (後書き)

サブタイトルが思いつかない…

あとムリに終わらせようとしているので文章がかなり適当です>M

—— () M <

4話 好き 理沙 side

朝起きた時、私は決めていた。

私はこれ以上達也の姿をした別の人とは一緒に暮らせない。

このままだと私が壊れてしまう。

だから…

達也に、出ていってもらおう…

多分達也もそうしたいと思っている。

全然知らない重い女と一緒に暮らしていてもしんどいだけだから。

「あ、立川！おはよー！」

後ろで達也の声でした。

私は達也の方を向きもせずと言う。

「達也、私が今日大学から帰ってくるまでにこの家を出て行って

「はっ？」

達也がきよとんとした声で言う。

「だから、この家を出て行ってって言うてるのよ…！…！…」

私は振り返って大声で言った。

達也は一瞬驚きの表情を見せたあと、怪訝な顔をした。

「なんで?? はじめに自分の家にきてもいいって言ったのは自分だ
る?」

「でも、もうダメなの。だってあなたは達也じゃないもの。…私、
耐えられないの! あなただって私といっても疲れるだけでしょ!？」

私は思っていることを声に出して言った。

達也の返事は聞きたくない。

そう思ってカバンをつかんでドアノブに手をかけた。

達也は止めてくれると思った。

けど、達也は何も言おうとはしない。

…やっぱり、もう元の達也はいないんだね…

涙が頬を伝う。

そして達也の方をふりかえった。

「ちよつなら。達也…」

そしてドアをあける。

もう二度と、達也と会うことはないだろうな。

そう思ったとき、

「理沙！」

急に名前を呼ばれて手首をつかまれた。

びっくりしてふりかえる。

「達也…??？」

今…理沙って…

達也は自分の行動に驚いたような顔をしていた。

「あれ？オレ…」

もしかしたら達也は私のことを思い出しかけているのかもしれない…

そう思うとたまらなくなって私は達也の肩をつかんで揺さぶった。

「達也、達也！思い出して！！私達、約束したでしょ！？必ずまた会おうって！！」

「約…束…??…っっ！！」

達也はそうつぶやくと急に苦しそうに額を押さえた。

そしてその場にしゃがみこむ。

私は驚いて達也のそばにしゃがみこんだ。

ど、どっしょよ…

私のせいで達也が大変なことになってるかもしれない…!!

「達也！大丈夫！？」

達也は返事をせず、ただ苦しそうに額を押さえつけている。

とりあえず救急車呼んだ方がいいかも…！

そう思っただち上がろうとしたとき、

急にふわりと何かが私の体をつつんだ。

「理沙…」

耳元で愛しい声がした。

懐かしい、愛おしく私の名前を呼ぶ声。

「オレ、ちゃんと約束守れたよな？？」

それはまぎれもない、私の大好きな人の声だった。

「…帰ってくるの、遅すぎだよ…バカ…！」

涙でうまく言葉がでない。

でもうれしくてうれしくて仕方がなかった。

やっと本当の達也が帰ってきてくれたんだ。

私は達也の背中に手をまわした。

「ほんまに…おそなっでごめんな？」

達也の瞳が私の瞳をのぞきこむ。

「…キスしてくれたら許してあげる」

達也は少し驚いたように頬を染めてはにかんだ。

「…ったく、しゃーないなあ…」

私はそっと目を閉じた。

そして達也の唇が私のそれに触れる。

幸せすぎて、胸がいつぱいになった。

ああ…きっと私はこれから先もずっと、

ずっとずっと達也のことが大好きなんだろうな。

そう思った。

4話 好き 理沙side(後書き)

本当に適当におわらせてしまいました…

期待してくれていた皆さん、(いないと思いますが…)本当にごめんなさいorz

今思えば理沙って結構わがままですよね；

そしてこの作品、1から読みなおしてみると結構ばからしくて恥ずかしい；

あ、あと達也sideも残っているので一応目を通してやっただ

さい>33(——)33<

4話 約束 達也 side

朝目が覚めた時、すぐに昨日のことを思い出した。

あー、そうだ。

そういや立川と昨日なんかケンカしてたんだよねー…

なんか今日会いづらいけど…

まあいいか。

オレはそう想い、部屋を出た。

「あ、立川！おはよー！」

リビングで立川を見つけたオレは昨日何事もなかったかのようにあいさつした。

なのに立川はオレの方を見ようともしない。

…なんだよ。

まだおこってるのかよ…

本当にこいつだけはしつこいやつだな…

そう思った時、

不意に立川が言った。

「達也、私が今日大学から帰ってくるまでにこの家を出て行って」

「はっ?」

思わず聞き返す。

いきなり何を言ってるだ、こいつは。

すると立川が急に振り返って叫んだ。

「だから、この家を出て行ってって言うてるのよ!!!!」

オレは一瞬言葉が出なかったが、すぐに言い返した。

「なんで??はじめに自分の家に来てもいいって言ったのは自分だろ?」

自分から言っというて…

急に何を言い出すんだ?

この女は…

「でも、もうダメなの。だってあなたは達也じゃないもの。…私、耐えられないの!あなただって私といっても疲れるだけでしょ!?」

立川は少しヒステリックげみにいった。

そしてそばにあったカバンをつかんでドアノブに手をかける。

オレは止めようとはしなかった。

なぜならさつき立川が言ったことに共感できるからだ。

たしかにオレはあいつのしってるオレじゃない。

それに、オレもあいつといっても疲れるだけだ。

なら、オレはここを出ていった方に決まっている。

それの方が楽しそうだ。

立川が急にふりかえった。

なんだよ？

やっぱり出ていかせる気なんかないんじゃないか？？

そう思ったが、オレは立川の表情を見て驚いた。

「さようなら。達也…」

そう言った立川の顔は涙にぬれていた。

…なんで泣いてるんだよ…???

そう思った時、

頭の中で声が聞こえた。

おまえが泣かせたんや

その声はオレの声とまったく同じだった。

…オレが???

何してるん？はやく引きとめろ！おまえのせいやぞ!?

…いや、おまえのせいといわれてもオレは泣かせるようなことをした覚えはない。

それにオレはこいつと離れて暮らした方がいいに決まっている。

…ほんまに???

オレは素直な返事ができない気がした。

そして…

「理沙!」

気がつくくと、立川の手首をつかんでいた。

「達也…???」

立川が驚いたようにふりかえる。

「あれ?オレ…」

何してるんだ？？

別に引き留めるつもりはなかったはずなのに…

立川が急にオレの肩をつかんだ。

そして激しく揺さぶる。

「達也、達也！思い出して！！私達、約束したでしょ！？必ずまた会おうって！」

「約…束…？…？…つつ…！」

急に割れるような額の痛みに襲われた。

頭の中にいろいろなシーンがフラッシュユバツクする。

夏のキャンプで『誰か』と過ごしたこと。

花火大会で『誰か』と初めてキスしたこと。

そして

急に大阪に戻ることを告げられたこと。

ショックでむりやり『誰か』を求めようとしたこと。

別れの時に『誰か』とまた必ず会おうと約束したこと。

絶対に『誰か』の元に戻ってくと誓ったこと

その『誰か』とは…

立川…いや、

…理沙。

そう。

そうや。

オレがここにきた目的は…

…理沙との約束を果たすため…

顔をあげるとすぐそばに理沙の顔があった。

理沙が立ち上がるうとする。

オレはそれを阻止するように抱きしめた。

少しでもはやく、理沙に触れたかった。

「理沙…」

愛しくてたまらない名前を呼ぶ。

オレにとって大切に、かけがえのないやつの名前。

「オレ、ちゃんと約束守れたよな?？」

オレはおまえとの約束を守るためにおまえのところに帰ってきたんや。

まあちょっと記憶なくしてまうとか、遠まわりもしたけど…

ちゃんとおまえのところに帰ってきた。

「…帰ってくるの、遅すぎだよ…バカ…！」

理沙は顔を涙でぬらしながら笑顔で言った。

そしてオレの背中に手をまわす。

オレはそんな理沙の瞳をのぞきこんだ。

「ほんまに…おそなってごめんな?？」

オレは記憶をなくしてる間、おまえのことを悲しませてた。

ほんまに…

もつとはやく記憶が戻ってたらおまえをこんなに傷つけんですけど…
の…

「…キスしてくれたら許してあげる」

理沙は小さな声でぼそりと言った。

驚いて思わず顔が熱くなる。

「まったく、しゃーないなあ……」

理沙がそつと目を閉じる。

オレも目を閉じて、そつと理沙の唇に触れた。

久し振りに理沙のぬくもりを感じた気がした。

やつと……

オレは理沙のもとにたどりつけたんやな。

ここまでくるのにまあまあ時間がかかったけど……

こんどはもうはなさへん。

理沙。

オレとおまえはこれから先、ずっとずっと一緒や。

4話 約束 達也 side (後書き)

これで本当に本当に完結です。

まったく終わり方が急すぎてよくわかりません；

まあそれは許してあげてください > m) (m <

ちなみに今新しく『純恋』という小説も書いています。

この話とは少し違った感じの話ですが…

気がむいたらよんでみてくださいね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5714h/>

大好きです 2

2010年10月21日23時23分発行